

本院における顎関節症チーム診療にみられる登録患者の概要

野村修一, 紋谷光徳, 三浦香,
加茂剛介, 河野正司, 濱本宜興*,
高木律男**, 鈴木政弘***, 山田浩之****

新潟大学歯学部附属病院 特殊歯科総合治療部 (部長: 河野正司教授)

新潟大学歯学部 *口腔外科学第1講座 (主任: 中島民雄教授)

**口腔外科学第2講座 (主任: 大橋靖教授)

***歯科補綴学第1講座 (主任: 河野正司教授)

****歯科補綴学第2講座 (主任: 草刈玄教授)

Outline of TMD Patients Enrolled in the Team Approach Program in Our Hospital

Shuichi Nomura, Mitsunori Monya, Kaori Miura, Gohsuke Kamo,
Shoji Kohno, Yoshiok Hamamoto*, Ritsuo Takagi**,
Masahiro Suzuki***, and Hiroyuki Yamada****

Polyclinic intensive oral care unit (Director: Prof. Shoji Kohno)

*Departments of *1st oral and maxillofacial surgery (Chief: Prof. Tamio Nakajima),*

***2nd oral and maxillofacial surgery (Chief: Prof. Yasushi Ohashi),*

****1st prosthetic dentistry (Chief: Prof. Shoji Kohno),*

*****2nd prosthetic dentistry (Chief: Prof. Haruka Kusakari), School of Dentistry,*

Niigata University

Key words: 顎関節症・temporomandibular disorders, チーム診療・team approach, 登録患者・enrolled patient

Abstract: A team approach for temporomandibular disorders (TMD) patients in our hospital started in November 1993. The purpose of this study was to obtain an outline of patients who were enrolled to our team clinic. A total of 703 patients were examined over a period of 30 months from January 1994 to June 1996.

Female patients were predominant, with a woman-to-man ratio of 3.23:1. Age range was from 9 to 82 years. The distribution of patients by age groups was 24% in 9-19 years, 33% in 20-29 years, 12% in 30-39 years and nearly 10% in 40-49, 50-59, 60-82 years. In the young population, patients under 15 years were 8.4% and 16-18 years were 11.7%.

The distribution of patient's residence showed 68% of patients came from Niigata district. Patients attended on referral to the team clinic were only 24.3%, this figure pointed out the necessity of more information to general dental practitioners and medical doctors.

抄録: 新潟大学歯学部附属病院では平成5年11月から, 特殊歯科総合治療部を窓口とした顎関節症チーム診療体制が発足した。平成6年1月から2年6カ月間に, いわゆる顎関節症の症状を訴えて来院し登録された患者の全体像を把握する目的で調査した。

登録患者数は, 平成6年が278名, 平成7年が272名, 平成8年の半年間で153名の合計703名であった。男女比は1:3.23と, 従来の報告にある男女比の範囲内であった。患者の年齢は9歳から82歳に分布した。年齢別分布では, 10歳代は24%, 20歳代は最も多く33%であった。30歳代は12%, 40歳代以降はいずれもほぼ10%と, 20歳代をピークとする1峰性の分布を示した。この内, 若年者では, 15歳以下が全体の8.4%を, 16歳~18歳が11.7%を占めた。今回の特

徴として、10歳代と20歳代が全患者数の57%と過半数を越え、とりわけ、女性は44%を占めた。

月別患者数では、3月、4月、8月に多く、12月、1月の冬の時期と7月に少なかった。患者の地域分布では、新潟市と西、中蒲原郡などからなる新潟地区は67%を占めた。紹介来院患者数は全体の24.3%と、その割合はまだ少なく、今後もピーアール活動が必要なが示された。初診時診査後に精査と治療を依頼した診療科別の患者数では、新患当番を担当した曜日によると思われる差があった。

緒 言 結 果

新潟大学歯学部附属病院では平成5年11月から、特殊歯科総合治療部を窓口とした顎関節症チーム診療体制が発足した。顎関節症の症状を訴える初診の患者は予診室での診査後に、特殊歯科総合治療部を受診し登録される。受診相談や、他の医療機関からの紹介先としての窓口が一本化され、診療科別ではなく病院全体としての患者動向が把握できるようになった。

より効率的なチーム診療体制を整えるためには、まず受診した患者の全体像を明らかにする必要がある。過去に報告された本院における顎関節症患者の臨床統計^{1,2)}は、いずれも口腔外科を受診した患者を対象としており、病院全体としての患者動向ではなかった。

そこで、特殊歯科総合治療部に登録された顎関節症患者の統計を報告し、若干の考察を加えたい。

調 査 対 象

平成6年1月から平成8年6月までの2年6カ月間に、いわゆる顎関節症の症状を訴えて本学歯学部附属病院に来院し、特殊歯科総合治療部を窓口として登録された703名を調査対象とした。

なお、初診時の診査は、患者への対応が一貫するよう、口腔外科、補綴科、特殊歯科総合治療部の専任歯科医が交代で担当した。

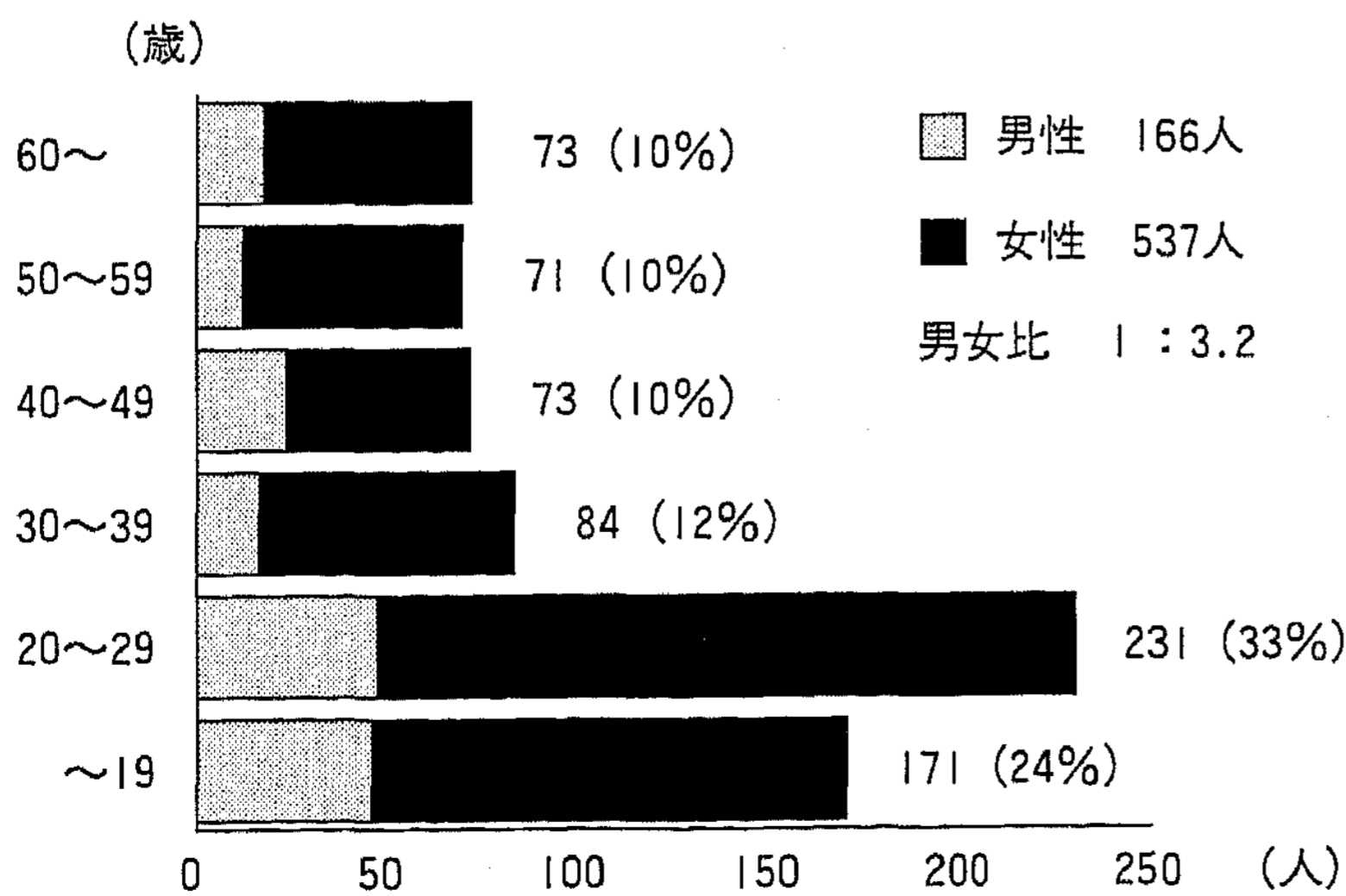


図1 患者の年齢・性別分布

登録患者数は、平成6年が278名、平成7年が272名、平成8年の半年間で153名の合計703名であった。このうち、男性は166名、女性は537名と女性が多く、男女比は1:3.23であった。

1. 年齢と性別分布

患者の年齢は9歳から82歳に分布した。10歳代は男性46名、女性125名の合計171名、24%であった。20歳代は男性48名、女性183名の合計231名、33%と最大の比率を占めた。また、30歳代は12%、40歳代以降はいずれもほぼ10%の患者数を示し、1峰性の分布であった(図1)。

このうち、若年者は表1に示すように、15歳以下すなわち中学生以下は、合計59名で全体の8.4%を占めた。また、16歳~18歳は合計82名、11.7%であった。

2. 月別患者数

月別の登録患者数では、3、4、8月に多かった(表2)。3月と8月には18歳以下の患者が約30%を占め、学校の春休みや夏休み期間中に受診したと思われる。逆に、12月、1月の冬の時期と7月には少なかった。

3. 紹介患者

紹介を受けた患者数は171名で、全体の24.3%であった。その紹介元医療機関の内訳は、歯科医院からが90名と最も多く、約半数を占めた。次いで、本院他診療科からが48名、総合病院の歯科からが23名であった。一方、

表1 若年患者数

年齢	男性	女性	計
~11歳	名	2名	2名
12	3	8	11
13	5	11	16
14	4	12	16
15	7	7	14
小計	19	40	59 (8.4%)
16歳	8名	22名	30名
17	4	26	30
18	6	16	22
小計	18	64	82 (11.7%)

表2 月別患者数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1994年	14名	23名	27名	38名	28名	27名	19名	27名	23名	19名	19名	15名
1995	19	20	30	19	20	20	18	27	20	29	26	24
1996	24	18	24	27	26	34						

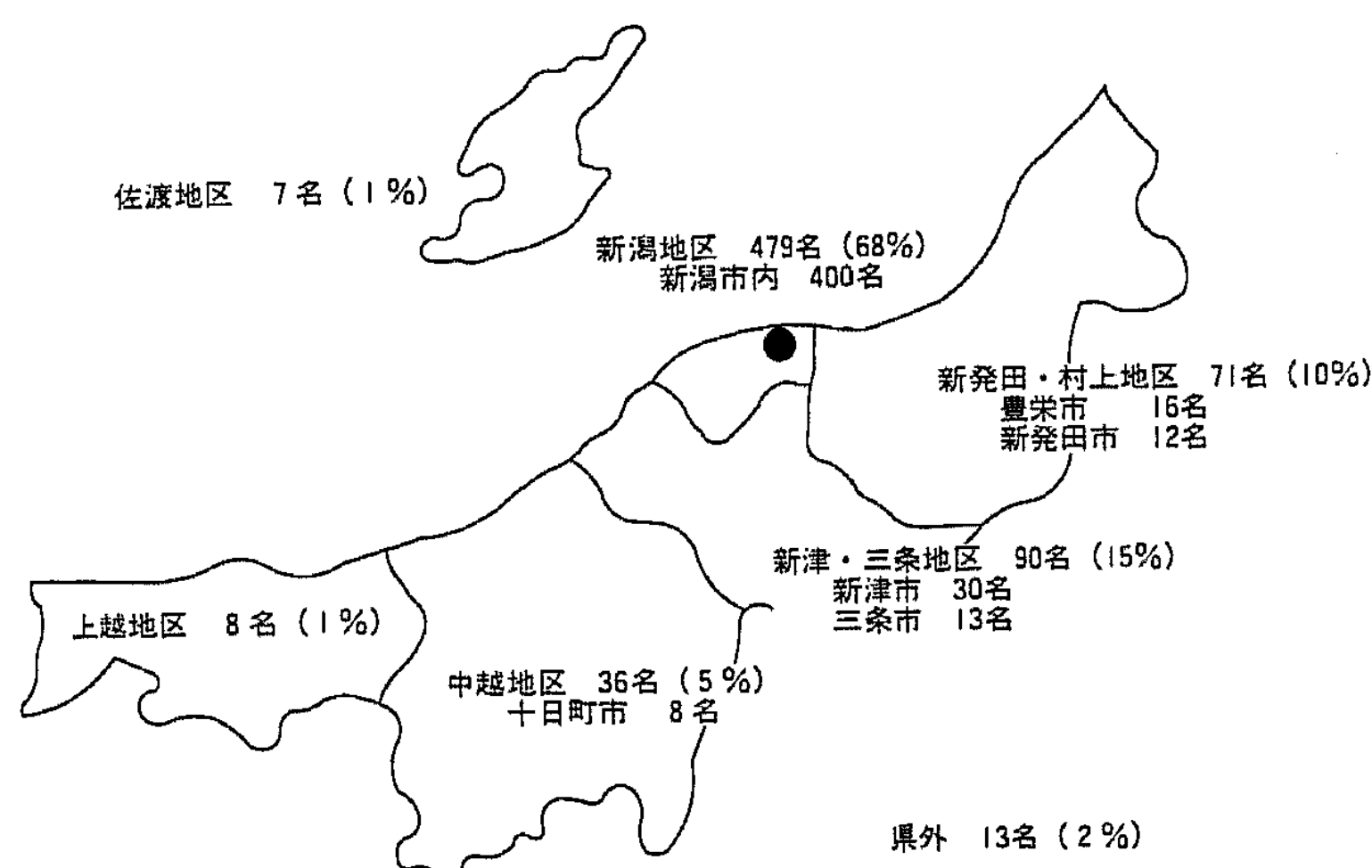


図2 患者の地域分布

では予診室での診査後に特殊歯科総合治療部を受診することや、初診時診査の担当者は各診療科において顎関節症患者を専任的に治療を行っている歯科医であること、診査の際には急速現像したパノラマX線写真を用いて鑑別を行っていることから、上記の類似疾患が含まれる可能性はかなり小さいものと思われる。

患者の性別頻度は、顎関節症患者群を対象とした従来の報告にある男女比の範囲内であった³⁾。

1. 患者の年齢構成について

年齢別頻度では、20歳代をピークとする1峰性の分布を示した。1988年に報告された成ら¹⁾や、渡辺ら²⁾による本院の口腔外科における顎関節症の臨床統計では、20歳代を中心とした大きなピークのほかに、50歳代、特に女性にはもう一つの小さなピークが示されている。今回の調査では2番目のピークは認められなかった。

また、今回の結果の特徴として、10歳代と20歳代の患者合計が占める割合は全患者数の57%と過半数を越えていた。とりわけ、女性は308名と全患者数の44%を占めていたことが挙げられる。これに対し、成らや渡辺らの報告^{1,2)}では、10歳代、20歳代の合計は50%に達しておらず、この年代の女性患者が占める割合も30%前後と今回よりも少ない。この若い女性患者が大きな割合を占めた理由に、年齢的特徴と男女差の相乗効果の他に、本疾患への関心の違いも考えられた。ここ数年来、女性を購読者とする一般雑誌に顎関節症に関する記事がたびたび掲載されていることから、女性における本疾患への関心の高さが推測される。

一方、近年、小児における顎関節症患者の増加が指摘されている。今回の調査でも、11歳以下が2名、12歳が11名、13歳が16名、14歳が16名、15歳が14名と中学生以下が合計59名、8.4%を占めた。15歳以下の顎関節症患者が全顎関節症患者に占める割合は、本院第2口腔外科における調査では、昭和49～昭和59年の約10年間では5.4%であった⁴⁾のが、昭和60年～平成6年の10年間では10.5%に増えていた⁵⁾。今回の調査期間は2年半と短いため断定はできないが、小児における顎関節症の増加傾向を裏付ける結果と思われる。

2. 紹介元医療機関について

前述の成らの報告¹⁾によれば、紹介来院患者は全体の

医学部附属病院あるいは医院からは10名と少なかった。

歯科医院からの紹介患者数は若干であるが増加傾向にあった。

4. 治療依頼診療科別患者数

本院のチーム診療では、初診時に共通資料としての問診表と診療録を用いた診査を行い、その後、最適な診療科に診断、治療を依頼する体制となっている。診断、治療を依頼した診療科別の患者数は、1口外155名、2口外117名、1補綴176名、2補綴109名、特歯127名、矯正8名であった。新患当番を担当した曜日によると思われる差が認められた。

5. 患者の地域分布

新潟市、中蒲原郡などからなる新潟地区は68%を占めた。とりわけ、新潟市内は57%と過半数を越えていた。また、新潟地区に新津市、豊栄市を加えた、新潟市近郊20km圏内からの来院が75%と大部分を占めていた(図2)。

考 察

今回の調査は特殊歯科総合治療部を窓口とする顎関節症チーム診療体制に登録された患者の全体像を把握することを目的としている。そのため、いわゆる顎関節症の症状を訴え、登録された患者を対象とした集計で、顎顔面部の外傷、炎症、腫瘍性病変などの類似疾患が完全には鑑別、除外されていない可能性がある。しかし、本院

約50%を占め、そのうち整形外科、耳鼻科などの歯科以外の医療機関からの紹介が約半数であった。しかし、今回の調査では24%と低く、特に医科からの紹介は極めて少なかった。その理由として、特殊歯科総合治療部として新患受付を開始してまだ日が浅く、その存在や診療内容が十分認識されていないためと思われた。顎関節症の治療には関連する医科との連携は不可欠であることから、今後もさまざまな機会を利用してピアール活動を行う必要がある。

3. 初診担当方法について

初診時診査後に、精査と治療を担当したのは、ほとんどが新患当番を担当した診療科であった。新患担当医が他の診療科へ紹介したのは約20名で、歯列不正が著しく矯正治療を必要とする症例、急性のクローズドロック症例などであった。この理由として、診査によって既に病態がかなり把握できていることや、最初に選択される治療法が診療科によってそれほど差異がないことから、引き続き治療を担当することが効率的と判断したことが考えられる。一方、当番制の弊害を反映している恐れもある。すなわち、初診診査を担当した歯科医がそれぞれの診療科へ機械的に治療の担当を依頼した傾向を示している可能性がある。

多くの発症因子が関与し、多様な病態を呈する顎関節症に対し、一診療科単独での対応には限界があることは明らかなことから、今後も病院全体としての効率的な診療体制を検討していく必要性が示された。

4. 患者の来院地区について

地区別にみた患者の割合は、山口ら⁹⁾が報告した本学小児歯科外来における来院患者の実態調査とほぼ同じであったが、新潟市内が過半数を越えている点異なっていた。来院の容易さとともに、顎関節症の発症には心理的因子が関与すると考えられていることから、都市部の生活がより精神的緊張を引き起こしやすい側面を示しているのかもしれない。

結 語

平成6年1月からの2年6カ月間に、いわゆる顎関節症の症状を訴えて来院し、特殊歯科総合治療部を窓口として登録された患者数は、合計703名であった。男性は166名、女性は537名で、男女比は1:3.23であった。年齢別

頻度では、20歳代をピークとする1峰性の分布を示した。10歳代と20歳代の合計は全患者数の57%と過半数を越え、特に、女性患者は44%を占めた。

紹介を受けた患者数は全体の24.3%と、割合はまだ低く、一層のピアール活動が必要であることが示された。また、初診時診査後に精査と治療を担当したのは、殆どが新患当番を担当した診療科であり、機械的に依頼していた傾向が示された。効率的なチーム診療体制への検討課題と思われた。

本論文の要旨は第28回新潟歯学会総会(平成7年4月、新潟)ならびに第9回日本顎関節学会総会(平成8年7月、東京)において発表した。

謝 辞

新患当番を担当していただいた諸先生方に感謝致します。

文 献

- 1) 成 辰熙, 小松賢一, 高木律男, 千葉順一, 大橋 靖, 当科における顎関節症患者の臨床統計的観察, 新潟歯学会誌, 18:23-32, 1988.
- 2) 渡辺八重子, 永瀬 守, 河野正己, 刈屋 功, 中島民雄, 中村太保, 伊藤寿介, 山上伸一, 顎関節症の臨床統計的検討, 新潟歯学会誌, 18:77-86, 1988.
- 3) The American Academy of Orofacial Pain, Charles McNeil edit. Temporomandibular Disorders Guidelines for classification, assessment, and management 19-25, 1993, Quintessence Publishing, Chicago.
- 4) 成 辰熙, 五十嵐一男, 小松賢一, 高木律男, 大橋靖, 小児に発症した顎関節症の臨床的検討, 日口外誌, 31:1809-1817, 1985.
- 5) 笠井直栄, 高木律男, 小林竜彰, 武田明義, 大橋 靖, 松下 健, 当科における最近10年間の小児顎関節症の臨床的検討, 日顎誌, 8:295, 1996.
- 6) 山口政彦, 中島美智子, 長谷川香子, 山崎博史, 富沢美恵子, 野田 忠, 新潟大学歯学部小児歯科外来における来院患者の実態調査, 新潟歯学会誌, 11:23-30, 1981.